

全科協ニュース

URL <http://jcsn.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成19年11月1日発行（通巻第217号）

誰にもやさしい博物館づくり 高齢社会における博物館の在り方 —日本博物館協会「高齢者プログラム委員会」の報告から—

国立科学博物館 小川 義和

1. はじめに

高齢化が急速に進む我が国において、博物館はどのような改善を図り、どのような社会的役割を果たすべきなのか、こうした問題は単に博物館関係者のみならず、社会全体の重要な課題となっている。日本博物館協会では、文部科学省の委託を受けて、平成15年度に「博物館における高齢者を対象とした学習プログラムの開発委員会」（平成16年度「高齢者プログラム委員会」を設置、以後、本委員会と表記）を設けて、この課題の調査研究を開始した。

本稿は、平成15～18年度の本委員会等の調査研究の成果の一部を紹介し、高齢社会における博物館の在り方について考察するものである。

2. 博物館の高齢者対応の現状と課題

社会の高齢化に対応して博物館は何をすべきなのか。本委員会では、平成15,16年度に博物館及び利用者である高齢者を対象にアンケート調査を実施した（図1は16年度の結果）。上記の調査結果から明らかになった我が国の博物館の高齢者対応の現状を以下に紹介する。

「高齢化に対し博物館は何をなすべきか」という質問に対し、博物館側と利用者側に共通する意見として、「設置目的をきちんと果たす」「高齢者が親しみやすくくつろげる博物館」「高齢者が楽しめる講座」「高齢者が好む展覧会や展示」「高齢者の経験や能力を生かす事業」等の回答が見受けられた。これらの要望に対し博物館の現状はどうか。

例えば「高齢者が親しみやすくくつろげる博物館」に関しては、段差解消のバリアフリーや休憩用の椅子等、各博

物館のハード面の取り組みは総じて進んでいる。しかし、音声ガイド等、ソフト面では十分に対応しておらず、課題がある。「高齢者が楽しめる講座」や「高齢者が好む展覧会」に関しては、約半数の博物館が「高齢者に人気のある展示」を意識していた。「高齢者の経験や能力を生かす事業」に関しては、多くの博物館で高齢者をボランティアとして受け入れており、社会還元の場合として博物館を位置づけていることがうかがえる。

これらの意見と現状は、利用者・提供者側双方にとって共通する重要な課題であり、高齢社会における博物館の在り

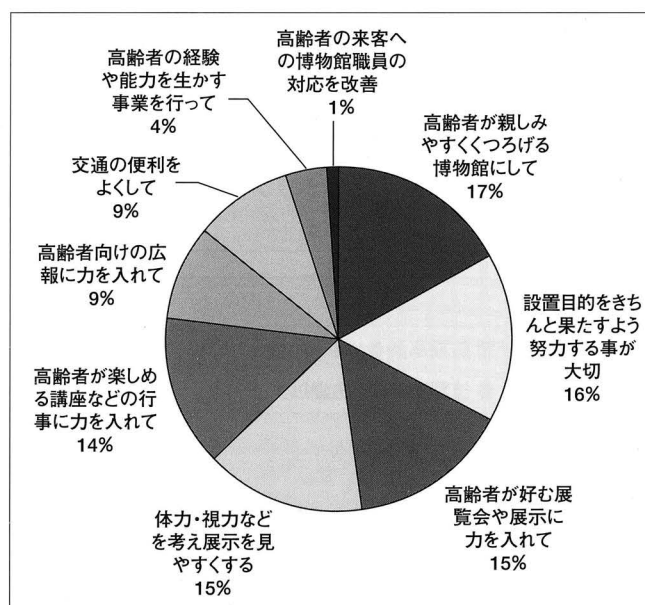


図1 平成16年度利用者調査結果

社会の高齢化に対応して博物館は何をすべきか

総数1490

日本博物館協会(2005):博物館の望ましい姿シリーズ5

「誰にもやさしい博物館づくり事業高齢者プログラム」をもとに作成

方を考察する上で考慮すべき内容である。まず、各博物館はそれぞれの設置の目的に基づいた運営を行うことで、高齢社会における博物館の役割を適切に果たすことができるということが前提となる。その上で高齢者にとって博物館とは親しみやすくつろげる場、経験や能力を生かす場であるとともに、高齢者の高い学習意欲に対応した生涯学習の場としての機能が重要になってくる。これは社会の一員である高齢者が自らの役割を果たす、参加と生きがいの場として博物館を捉えることになるだろう。

なお認知症高齢者のケアと予防としての回想法を取り入れた博物館の先進的な活動事例があった。これは博物館の持つ資料の特性を十分に活用したプログラムであり、高齢者の生活の質を高める博物館の新たな運営方略として期待される。

3. 今後の取り組みへの提言

今後数年の間にいわゆる「団塊の世代」が退職の時期を迎える。例えば我が国のものづくりを支えてきた企業では、退職する技術者を再雇用し、技術を次世代に継承するしくみを導入するなど、これから高齢者となる人々の知識・経験・技能を広く社会で活用することが求められている。

また我が国の個人資産の多くは、65歳以上の高齢者によって所有されていると言われている。もはや高齢者を手厚くケアするだけでなく、高齢者の蓄積した知的、人的、財政的資源を社会に還元、循環させることが今後の日本社会の活力を生み出し、持続可能な社会の実現につながるとの認識が社会に共有されつつある。

今後地域共同体の担い手としての高齢者の役割はますます大きくなっていくであろう。ボランティアに限らず、様々

な形態での働き手として高齢者はこれからの新しい地域共同体の形成と文化活動の継承・発展に欠かせない存在である。時間的余裕を持ち、経験豊富な高齢者に十分な社会参加の機会が与えられることが重要である。

文化的な国家を目指す我が国は、文化遺産を後世に残し、国民の芸術文化活動や科学的・学術的活動を支える社会基盤の構築を重視すべきである。博物館は社会の文化遺産を保存し、活用し、その価値を創造し、発信する場であり、人々の文化的活動を支援する拠点でもある。博物館には高齢者が力を発揮できる機会がたくさんある。

本委員会としては、こうした考えの下に調査研究の成果を考察し、高齢社会における博物館の在り方について、以下のとおり提言としてまとめた。

(1) 参加と生きがいの場として

各博物館が使命・目的に基づいた運営を行うことで、誰にもやさしい博物館を実現し、高齢者にとって、社会的な参加を促し、生きがいをもてる環境を創出する。

(2) ふれあいの場として

博物館の資源を活用した高齢者向けの展示や参加プログラムを開発・実施し、高齢者に参加してもらうことで同年代や異年齢の人々との交流を促していく。

(3) 学びの場として

高齢者向けの学習活動の充実を通じて高齢者の学ぶ意欲に応えるとともに、高齢者が参加するボランティア活動等において、ともに学びあうことの楽しさ、喜びを提供する。

(4) 知の社会還元の場として

高齢者が参画するボランティア活動を通じて、「自己を高め、自ら学ぶとともに、高齢者の持つ経験・能力・物の

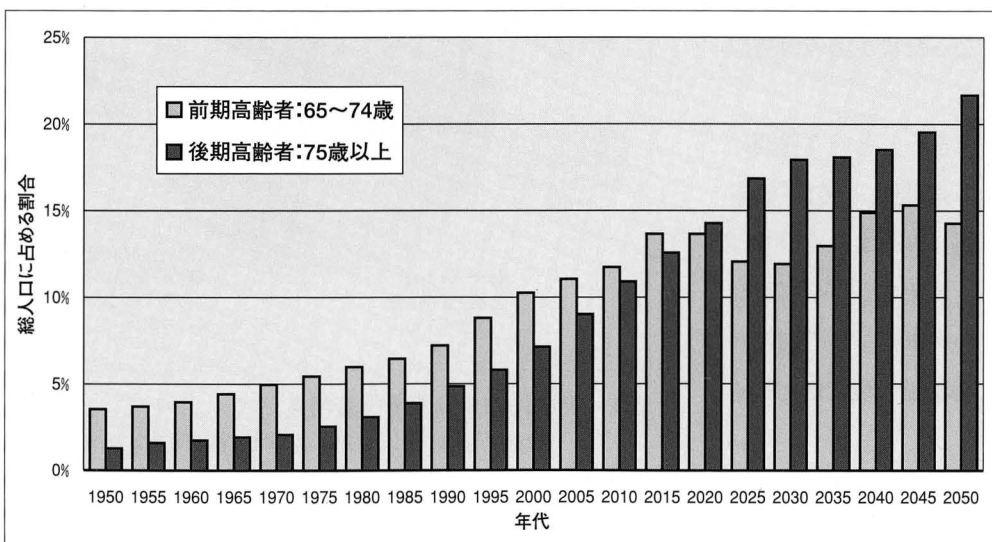


図2 高齢化の質的变化

平成19年度高齢社会白書

(<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>)

をもとに作成

見方・考え方」を社会還元する場として、社会に貢献する。

(5)社会的役割を担う場として

高齢者が博物館と関わりを持ち、博物館の活動に参加することを通じて、高齢者と博物館がパートナーとして協働し、社会的役割を果たす。

(6)生活の質を高める場として

博物館と福祉施設の連携や博物館展示における回想法の実施など、福祉行政の観点から高齢者の生活の質を高める。

4. おわりに～「高齢者のための対策」から「高齢社会対策」へ

この調査研究の間に、我が国は大きな転換期を迎えた。平成18年の総人口は、1億2,777万人で、前年に比べてほぼ横ばいとなっている一方、65歳以上の高齢者人口は、過去最高の2,660万人となり、総人口に占める割合も20.8%となっている。現在我が国では5人に1人が高齢者である高齢社会になっている。さらに今後は単に高齢者の数が増えるだけでなく、75歳以上の後期高齢者の割合が増え、高齢化の質的变化が起こると予測されている(図2参照)。

このような社会構造の変化にあって、今後とも博物館が社会の中で積極的な役割を担う「生きた博物館」であるためには、利用者の高齢化による要望の変化にどう応えるか

という、受け身の対応だけでは不十分である。社会の高齢化という大きな流れの中で社会が活力を失わないようにするために、博物館も積極的な役割を担うことが必要である。今後博物館に求められているのは、「高齢者対策」から「高齢社会における博物館の在り方」という視点への転換である。

我が国においては、高齢社会対策基本法(平成7年法律第129号)に基づき高齢社会対策の総合的な推進が図られている。その中で「高齢化の進展に適切に対処するための施策」として、「国民一人一人が生涯にわたって真に幸福を享受できる高齢社会を築き上げていくためには、雇用、年金、医療、福祉、教育、社会参加、生活環境等に係る社会のシステムが高齢社会にふさわしいものとなる」ことが必要とされている。

今後博物館は、教育、研究、文化のみならず、社会における生活、雇用、福祉、医療、環境、社会参加を担う機関として、高齢社会にふさわしい在り方を模索していく必要がある。

*本報告の詳細は、博物館の望ましい姿シリーズ11「誰にもやさしい博物館づくり事業：高齢者プログラム」(日本博物館協会, 2007)を参照のこと。

博物館におけるバリアフリーと研修の重要性

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 小幡 和男

「21世紀に我が国が目指すべき社会は、障害の有無にかかわらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会とする必要がある。

共生社会においては、障害者は、社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下に社会のあらゆる活動に参加、参画するとともに、社会の一員としてその責任を分担する。

他方、障害者の社会への参加、参画を実質的なものとするためには、障害者の活動を制限し、社会への参加を制約している諸要因を除去するとともに障害者が自らの能力を最大限発揮し自己実現できるよう支援することが求められる。…」

これは、障害者関連施策の基本的方向を示した「障害者基本計画」の冒頭の文章である。近年、社会におけるノーマライゼーションの理念の浸透に伴い、博物館もまた障害

者に対して前向きにかつ適切に対応することが求められている。

日本では、平成5年に「障害者基本法」が制定され、その後、「ハートビル法」、「交通バリアフリー法」の制定など、障害者支援に関する法律が次々と整備されてきた。博物館のバリアフリーにおいても、この十数年の間に、建物の施設・設備や交通のアクセスなどハード面に関して急速に進展してきた。しかし、実際に障害者に対応する博物館スタッフの意識の向上やソフト面での改善については、まだまだ課題が多いといわれており、研修の重要性が指摘されている。

そこで、博物館のバリアフリーのソフト面における推進に関して2つの事項を紹介する。1つは、筑波大学大学院生半田こづえさんの研究であり、もう1つは、筆者の勤務するミュージアムパーク茨城県自然博物館の展示解説員の

研修の状況である。なお、これらの詳しい内容は、日本博物館協会（2007）に掲載されているので参照していただきたい。

〔障害者が望む博物館〕

日本博物館協会では、文部科学省の委託を受けて、平成16年度に「誰にもやさしい博物館づくり事業」の中でバリアフリー委員会を立ち上げ、博物館におけるバリアフリーを推進するための諸事業を展開してきた。平成18年度には、筆者もこの委員会の委員の一人として参加し、いろいろと勉強する機会を得た。その中で最も印象に残ったのは、平成19年1月に行われたバリアフリー研修会での半田さんの講演であった。

半田さんは、1歳の時に視力を失った視覚障害者である。国際基督教大学在学中にアメリカの美術館で彫刻に触れて鑑賞する機会に恵まれ、深い感銘を受けた。それ以来、視覚に障害のある人々の博物館、美術館へのアクセシビリティを高める研究をしたいと切望し、現在、筑波大学大学院でその方面の勉強をしている。半田さんが発表したのは、視覚障害者が博物館を訪れる場合、最も強く求めているサービスは何かを明らかにすることを目的とした研究である。

研究は、まず視覚障害者にとってのアクセシビリティを向上させる要因を4つ選定した。4要因とは A. 誘導ブロックの有無（視覚障害者が単独で博物館の中を移動できるような設備があるか）、B. 展示へのアクセス（触って鑑賞できるような展示があるか）、C. 情報提供（音声ガイドや点字または大文字のパンフレットがあるか）、D. スタッフの理解（視覚障害に理解のある学芸員やボランティアがいるか）である。

障害者への面接調査実施の後、この4要因のうちどの要因が最も大切かを明らかにするためコンジョイント分析を行った。この分析は「Aはあるが、B、C、Dがない場合」に「行きたいか、行きたくないか」を5段階で評価するものである。障害者が単独で訪れる場合と、同行者のいる場合と2通り調べた。

結果は、単独の場合は、優先順位の1位がD. スタッフの理解、2位がB. 展示へのアクセスであり、A. 誘導ブロック、C. 情報提供の必要性は低かった。同行者のいる場合でも、1位と2位の順位は逆転したが、傾向は同じであった。つまり、「触って楽しめる展示があること」や「障害者に理解のあるスタッフがいること」は、博物館に行く時の



図1
手作りのパネルが並んだ案内コーナーと
展示解説員

重要な決め手になっているが、「誘導ブロックの有無」や「情報提供」にはそれほど関心が払われていないという結果である。スタッフの心構えと研修による障害者への理解が、いかに重要であることを示した研究であり印象深かった。

〔展示解説員の研修〕

博物館において、来館者と最初に接するのは、案内、改札、入館手続きなどの業務を担当するスタッフである（図1）。博物館によってはこれらの業務のすべてに人員を配置しているわけではないが、来館者が展示室に入るまで誰にも会わなかったという博物館はないであろう。半田さんのいう理解あるスタッフの一番手はこれらの業務の担当者である。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下当館という。）でこの業務を担当しているのは展示解説員であり、来館者のよりよい博物館利用のために、多岐にわたる業務を担当している。当館の展示解説員は、茨城県が雇用する23名の非常勤嘱託員で構成されている。その業務は一朝一夕にできるものではなく、常日頃の研修に裏付けられている。

新規採用の展示解説員の勤務が始まるのは新年度の4月からであるが、採用1カ月前の3月から徹底した新人研修が行われる。講師は、館職員、現役の展示解説員、外部講師などである。展示解説及び実務研修は、500ページを超えるマニュアルにしたがって進められる。マニュアルの原案は担当の館職員が作成したものであるが、毎年展示解説員により改訂が重ねられている。

当館は6月末に約1週間の燻蒸休館となる。その際、近隣の施設を借用して研修を実施し、その中で新人研修時の外部講師による接遇のチェックを行う。また、先進館を視察し、研修や相手館の展示解説員との交流を行う。

また、年4回実施する企画展、年1回のさわれる展示ハートフルミュージアム、その他常設展示の更新ごとに学芸員の解説による研修を実施する。さわれる展示ハートフル



図 2
視覚障害者の
誘導のしかた
を研修する



図 3
車いすで施設
設備をチェッ
クする

ミュージアムは、ハンズオン資料により特に視覚障害者に楽しんでいただくことを目的としたイベントであるが、展示解説員は、来館された障害者の方と直接接することで貴重な経験を積むことができる。

障害者への対応については新人研修、燦蒸中の研修において、その基本に関する研修を受けるが決して十分なものとはいえない。そこで、平成18年度は、1月に2回障害者対応を中心に特別研修会を実施した。第1回は視覚障害者への対応について、茨城県立視覚障害者福祉センターから講師を招いて、視覚障害の実際と障害者の誘導について研修した(図2)。第2回は、館内と野外で実際に車いすを使用し、不具合のあるところや危険箇所について点検した(図3)。平成19年6月には養護学校において研修を行った。研修の内容は養護学校の先生からの講話、施設の見学、各

クラスに分かれての実習などである。実習では、先生の補助をする形で実際に生徒たちと触れ合うことができ、肢体不自由児への理解を深めることができた。

障害者に対するアクセシビリティの向上を目指すことは、すべての来館者に満足していただける博物館をつくることにつながる。誰にもやさしい博物館をつくるためには、館職員一人ひとりのおもてなしの心が大切であることを認識し、さらなる研鑽を積み重ねていかなければならないと考える。

参考文献

日本博物館協会. 2007. 博物館の望ましい姿シリーズ10 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために, pp. 40.

誰にもやさしい博物館づくり ーアクセス権の保障と外国人観光客のためにー

常磐大学教授 水嶋 英治

私たち日本人は外国の博物館を訪問したときに、どのような不便さを感じるであろうか。ことばの問題はもちろんのこと、交通アクセスの問題、チケット売り場での歯がゆさ、道徳・習慣の違いによる戸惑いなど、枚挙に暇がない。逆に、外国人も日本の博物館の受け入れ体制に対して心地良さを感じている人もいる一方で、不快感を持つ人もいるだろう。日本の良さをアピールし、外国人観光客を増やそうと、観光政策が重要視される昨今であるが、日本の博物館も外国対応が迫られる今日この頃である。

「誰にもやさしい博物館づくり事業」の一環として日本博物館協会は文部科学省の委嘱を受けて平成16年度から3年間「外国人来館者対応委員会」を設置し、現状分析を踏

まえて外国対応のためのチェックリストを作成した。本稿ではその概要を紹介するとともに、今後の課題について述べてみたい。

外国人受け入れ状況の現状分析

平成16年度の調査研究では、現状分析をおこなうために日本博物館協会の会員館1200館に対してアンケート調査を実施して707館の回答を得た(回答率60%)¹。博物館における外国人来館者の対応について外国人が日本の博物館を訪れる際に想定される行動パターンにそってアンケートの質問項目を設計したが、具体的には、最寄駅からのアクセスを示す案内の有無、博物館までの行き方を示す道路標識の有無、建物の外側サイン、博物館ロゴマークの使用状況、



2007年に大改装した故宮博物院のエントランスホールに設置された案内サイン。日本語も表記されている。

(2007年9月、筆者撮影)



ワシントン空港に出店しているスミソニアン協会のミュージアムショップ。スミソニアンのロゴマークが統一され、商品にも店内サインにも使用されている。

(2007年8月、筆者撮影)

Webサイト上で外国語による公開、チケット売り場の外国語による入館料の表示の有無、外国語で書かれたチケット、クレジットカード利用の可否、ロッカーなど荷物を預ける設備・スペースの有無、玄関ホールなど外国語で書かれた館内案内地図の整備状況、「案内所マーク(?)」や「情報コーナー(i)」の表示、受付カウンターにおける人的対応の可能性、車イスの案内表示にピクトグラムの使用状況、「オーディオガイド」などの案内設備の有無、「オリエンテーションビデオ」などの情報提供設備の有無、外国語で書かれた「パンフレット」「ガイドブック」(解説書)、外国人対象の展示案内(ガイドツアー)の有無など、17項目である。

また、各館園が抱える外国人からのクレームに対する対応事例、外国人対応で困る点、外国人対応で良かった点などについても自由記述で回答を求めた。アンケート結果の詳細は省くが、わが国の博物館の現状を一言で言えば、外国人対応が遅れている状況にあり、改善の余地が多く残されていると言っても過言ではない。

外国人対応のためのチェックリストと博物館用語集の作成

これらのアンケート調査の結果を受けて「外国人対応のためのチェックリスト」を作成した。「館・園へのアクセス」、「博物館見学前の前段階」、以下、展示、館内サービスおよび施設に関するチェックリストを作成したⁱⁱ。また、江戸東京博物館など外国人来館者が比較的多い博物館を5館選定し、さらに詳細な調査を実施した。外国人来館者はツアーで訪問することも多いことから、外国人来館者に対するアンケートのみならず、館内のガイドツアー担当のスタッフ、ボランティア、ツアーコンダクターに対してもアンケートを実施した。さらに、平成17年度には、英語による用語集を作成する試みをおこなった。古美術、考古、伝統文

化、マネジメント関連の博物館用語などを編纂した。

博物館界に対する要望

調査研究事業の最終年にあたる平成18年度では、博物館ツアーをコーディネートしている旅行代理店およびガイド・通訳から博物館界に対する要望事項などをヒヤリングするとともに、博物館での外国人対応の取り組みについて詳細に検討した。

また前年度に試行版として作成した博物館用語集を充実させるべく、人文系では、江戸東京博物館、東京国立博物館の歴史関連用語(絵画、書蹟、彫刻、金工、武器武具、陶磁、漆工、染色、考古学、伝統文化など)、自然科学・理工系では、国立科学博物館、科学技術館の例を参考に、科学技術・自然史関連用語をもとに博物館用語集をまとめた。

今後の課題

外国人来館者を誘致し、多くの人に来てもらうためには、1館の努力だけでは不十分であり、周辺地域の博物館・美術館との連携、地方公共団体・旅行代理店・宿泊施設・交通機関等との連携・ネットワーク化が欠かせない。1館の努力だけでは出来ない課題も多くあり、縦割り行政の壁を越えて地方公共団体など博物館の設置者責任として取り組むべき課題も残されている。

外国人誘致のためのプロモーション活動は、外国語によるインターネットによる紹介、ホテル・観光施設等への外国語パンフレットの配布、公的機関へのPR、キャンペーン等への参画、英字新聞・外国語情報誌への掲載、外国語パンフレットの作成など様々であろう。

自国の文化を外国に発信していくためには、博物館界が総力をあげて取り組む必要があることは言うまでもなく、と同時に、周辺の観光産業・文化産業の協力、国・地方自

治体の支援策も不可欠である。今後は、博物館との架け橋をどのように組み立てていくのかという制度的・政策的な解決課題も検討していかなければならない。国際社会・情報社会と言われる今日、外国人対応、アクセス権の保障、アクセシビリティの向上にむけて、各館の更なる努力が求められているのではなかろうか。

- i) 結果は「博物館の望ましい姿シリーズ3 誰にもやさしい博物館づくり事業 外国人対応」(平成17年3月)を参照のこと。
- ii) 詳細は平成18年3月発行の平成17年度報告書「博物館の望ましい姿シリーズ6 誰にもやさしい博物館づくり事業 外国人対応」(平成18年3月)を参照のこと。

【外国人対応のためのチェックリスト】 一部

1 館・園へのアクセス	1-1. 館名サイン ☐博物館の建物の外側に外国語表記の館名サインがある ☐外国語の表記の場合、公式の館名とは別に、館の性格が分かるようなコレクションを名称の一部に入れるようにしている ☐ロゴマークを使用している ☐入り口の表示は分かりやすい 1-2. 公共交通機関からのアクセス ☐博物館の最寄駅（JR、私鉄、バス停留所）から博物館までの交通アクセスを示す案内図がある ☐貴館までの道路の途中に、博物館までの行き方を示す外国語の道路標識がある ☐初めて訪れる外国人のために、博物館の周辺に博物館の入り口までの誘導サインがある 1-3. インターネットアクセスに関する情報 ☐インターネットによって、博物館独自の情報提供をしている ☐インターネット上で公開されている館のホームページには、外国語によって博物館に関する情報提供をおこなっている ☐インターネットによって館藏品や展示品に関する情報が公開されている ☐博物館の開館時間や入館料、休館日について、分かりやすく正確な情報提供がされている ☐解説案内など事前に予約が必要な場合は、インターネット上で予約可能である ☐インターネットで公開されている情報には、博物館のコレクション内容、交通機関によるアクセス、乗換え方法、最寄駅からのアクセスが記されている ☐外国語による博物館周辺の地図を準備している
2 博物館見学の 前段階 インフォメーション	2-1. 印刷物による情報提供 ☐博物館の全体が分かる外国語パンフレットを作成している ☐ホテルや観光案内所に配布している博物館のパンフレットがある ☐そのパンフレットには、外国語で貴館までのアクセスが記されている 2-2. チケット ☐チケット売り場には、外国語表記がある ☐チケットには、外国語が表記されている ☐チケット購入の際に、クレジットカードを使用することは可能である ☐ICOMカード(国際博物館会議の会員証)の提示をすれば、入館料が無料である 2-3. インフォメーションカウンターおよびその周辺 (以下、省略)

クリーブランド健康博物館がクリーブランド自然史博物館と統合

アメリカで最も古い健康博物館である「ヘルスペース・クリーブランド」(旧称クリーブランド健康博物館 1936年開館)が、クリーブランド自然史博物館(1922年開館)と2007年1月1日に非敵対的な条件で統合された。旧健康博物館側の全職員は自然史博物館に新設された健康教育部門にまるごと移り、従来行ってきた活動を続けている。健康博物館の建物と敷地は、この統合を機会に長く協力関係にあったクリーブランド・クリニックに売却されたが、とりあえず現在の場所で2007年12月末まで展示活動を続けることになった。

Health Space Cleveland (Cleveland Health Museum).
Cleveland Museum of Natural History, Cleveland.

<http://www.cmnh.org/>

リバティ科学館が全面改装オープン

ニュージャージー州ジャージーシティーのリバティ科学館が、総工費109百万ドルをかけて全面改装され、2007年7月19日にオープンした。従来対象年齢が6歳から12歳までだったが、この機会に全年齢に拡大した。新たに6つの展示コーナーが設けられた。「Skyscraper! Achievement and Impact」では、都市という地理的環境の中でどのようにして超高層ビルが計画され、設計され、そして施工および維持管理されるかが紹介されている。「9.11」で倒壊した世界貿易センタービルで使われていた鉄骨も見ることができる。「I Explore」は、2歳から6歳までの乳幼児を対象にしており、社会的な関係の中で自分がだれであり、また社会から自分が何を享受されているかが紹介されている。「Eat and Be Eaten」では、野生動物の世界にある食物連鎖の関係が、捕食と被食という二つの側面で紹介されている。「Communication」では、古代から現代に至るまでコミュニケーションの歩みを紹介している。「Infection Connection」では、社会的な生き物である人間がとる相互影響作業の心理学・社会学的メカニズムを明らかにしてくれる。「Our Hudson Home」では、近くを流れるハドソン川に住む様々な生物の紹介と人間との望ましい関係が紹介されている。

Liberty Science Center, Jersey City.

<http://www.lsc.org/>

ピーボディー自然史博物館で、新しい地質学展示ホールが2008年にオープンへ

エール大学付属のピーボディー自然史博物館で、新しい地質学展示ホールが2008年5月にオープンすることになった。同校があるコネチカット州の地質が豊富な地質標本によって常設展示として紹介されることになっている。オープン時期は未定だが、その後に世界の地質を紹介する展示ホームも整備されるようだ。同館では2006年5月に地球と太陽系の歴史を紹介した常設展示ホールをオープンしたばかりだ。

Peabody Museum of Natural History, New Haven.

<http://www.peabody.yale.edu/exhibits/homes.html>

インディアナポリス子ども博物館に、「健康の家」が常設展として登場

若年齢層を対象に健康的な生活習慣を身につけることを目的にした新しい常設展示が、インディアナポリス子ども博物館に2007年3月3日に登場した。「健康の家 Health House」と名付けられた展示は、一軒の家屋を模してつくられ、同館の4階の屋内に設けられている。対象年齢が主に4歳から8歳までの年齢層に設定されているが、親もその対象となっている。

家屋の中は、いくつかのテーマをもった部屋によって構成されている。台所とそれに連なる食料貯蔵室では、どんなおやつが健康に良いかを学ぶことができ、また食品の原料や加工法を表示した食品ラベルについて学ぶこともできる。また台所に置かれている食卓は家族全員が一緒に食事をとることの重要性を伝えている。アメリカの専門家の研究によれば、食卓を家族が囲むことによって、子どもの体重の管理や学校での食事マナーに良い影響を与える傾向があると明らかになっており、そうした食卓の展示は単なる食卓以上の意味を持たせている。バスルームでは、正しい手の洗い方と歯の磨き方を学べるようになっている。バスルームでは特別な照明装置が設けられており、スイッチの操作により、バスルームの中でバイ菌の繁殖しやすい場所がわかるようになっている。寝室も、子どもたちが健康的な睡眠をとれる環境の設定方法を学べるようになっている。

Health House. The Children's Museum of Indianapolis.

<http://www.childrensmuseum.org/themuseum/healthhouse/index.htm>

シカゴ国際外科博物館に、義肢装具の歴史の常設展が登場

古代エジプト時代から現代に至るまでの整形外科と義肢装具づくりの歴史を紹介した常設展示が、シカゴ国際外科博物館に2007年5月5日に登場した。古文書とともに展示されている多くの歴史的な実物資料の中には、古代世界で使われた骨ノミ、骨鋸、ドリルなどの骨手術器具が含まれ、またアメリカ内戦期の骨切断器具と20世紀に製作された義肢装具が紹介されている。

Beyond Broken Bones: The Story of Orthopedics and Prosthetics.

International Museum of Surgical Science, Chicago.

<http://www.imss.org/newexhibits.htm>

シカゴ科学産業博物館に、地球の常設展が登場

衛星データに基づくほぼリアルタイムの地球の様子を再現した地球の新しい模型が、2007年9月14日にシカゴ科学産業博物館に登場した。炭素繊維でつくられた直径約180cmの地球儀には、米国海洋大気庁と米国航空宇宙局のデータを使ってコンピュータでつくられたイメージが投影されている。常時いくつかのトピックスが映像ショーとして用意されている。地球の気候、天気、海流、土地利用のパターン等が見られる。 Earth Revealed.

Museum of Science and Industry, Chicago.

http://www.msichicago.org/exhibit/earth_revealed/index.html

スミソニアン航空宇宙博物館に、アメリカの航空運輸史の常設展が登場

アメリカの航空運輸の歴史を紹介した常設展示ホールが、ワシントンDCのスミソニアン国立航空宇宙博物館に2007年11月17日にオープンする。同ホールでは、航空機を使った郵便サービスの黎明期から、現代に至るまでの航空運輸の歴史をはじめ、政府による航空会社の事業認可、航空の登場によってアメリカ人の生活様式にもたらした変化、航空を使った旅客輸送の歴史等が紹介されることになっている。

実物展示としては、最初に郵便物を運んだカーチス社製の複葉機「JN-4」をはじめ、フォード社製の旅客機「5-AT Tri-Motor」、ダグラス社製の旅客機「DC-3」と「DC-7」などが見られる。またボーイング社の747ジャンボ・ジェット機の実物のコックピットも設けられ、観覧者の中には入ることができる。

America by Air.

National Air and Space Museum, Washington DC.

<http://www.nasm.si.edu/exhibitions/gal102>

/americabyair/

ロンドン自然史博物館で、南極展が開催中

イギリス政府の国際極年(2007-2008年)への参加を記念して、南極での生活や自然を紹介した特別展「Ice Station Antarctica」が、現在ロンドン国立自然史博物館で開催されている。

英国南極観測局の全面的な協力を得た同展では、英国南極観測局の南極研究基地の活動を紹介しているだけでなく、南極の厳しい自然環境の体験や生物の紹介がなされている。南極で使われている本物の防寒具を着て、零下10度の寒さを体験できる冷凍室が設けられているほか、ペンギンの嘔吐物を実際に嗅いで、嘔吐物に含まれている魚、イカやオキアミを見ることができる。さらに南極海に住み、飛ぶ鳥としては世界最大のワタリアホウドリの剥製や特製の水槽に保存された巨大イカの標本やふだんあまり見ることができない奇怪な深海魚の標本も見ることができる。

会期：2007年5月25日～2008年4月20日。

Ice Station Antarctica.

Natural History Museum, London.

http://www.nhm.ac.uk/about-us/news/2007/may/news_11773.html

<http://www.alexantarctica.net/>

<http://www.antarctica.ac.uk/images/webcams/halley/>

http://www.antarctica.ac.uk/images/in_pictures/halley.php

テクニケンス・フス科学館で、「スウェーデンの極地研究」展が開催中

スウェーデン政府の国際極年(2007-2008年)への参加を記念して、南極での生活や自然を紹介した特別展「Cold Poles Hot Stuff」が、現在学園都市ルレアにあるテクニケンス・フス科学館で開催されている。

スウェーデン国際極年委員会の全面的な協力を得て企画製作された同展は、スウェーデンによる北極と南極の極地研究の活動を紹介したものである。現地での調査の仕事に従事する人々の生活や過酷な自然環境をも紹介している。

同展は、最初に米国ワシントンDCのスウェーデン・ハウスで2007年の春に開催され、そしてルレアに移動して開催の運びとなった。会期：2007年7月2日～11月4日。

Cold Poles Hot Stuff.

Teknikens Hus, Lulea.

<http://www.teknikenshus.se/utstallningar/tillfalliga/index.html>

* (やすいりょう) E-post:ZAKvaran@aurorao.ocn.ne.jp

11月12月の特別展

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
旭川市科学館	ミニ企画展「外来生物展」	11月3日～12月24日
岩手県立博物館	第2回北東北三県共同展「北東北自然史博物館～大地と生きもののふしぎ旅行～」	9月22日～11月11日
	テーマ展「岩手の溪流と釣り人」	11月23日～2月11日
郡山市ふれあい科学館 スペースパーク	ホワイエ企画展「星団めぐり」	11月1日～1月31日
	スペースパーク企画展「ダンボールであそぼう！～迷路でたんけん♪～」	12月1日～1月14日
ミュージアムパーク 茨城県自然博物館	第41回企画展「ミヤマスカシユリの薫る里－久慈川の流れにのって－茨城の自然を探る総合調査報告－」	10月20日～1月14日
栃木県立博物館	テーマ展「怖い？知りたい！毒キノコ」	9月8日～12月2日
高崎市少年科学館	「マグネット展」	10月6日～11月4日
群馬県立自然史博物館	第28回企画展「鳥たちの世界－その秘密にせまる－」	9月29日～11月25日
入間市博物館	特別展「入間を創った人たち～あの日、あの時、あの時代～」	10月20日～11月25日
所沢航空発祥記念館	秋の特別展「特別便へのご招待～VIPフライト・記念フライト・政府専用機～」	10月20日～12月2日
埼玉県立自然の博物館	企画展「多様な埼玉の自然」	9月15日～12月2日
千葉県立中央博物館	秋の展示「食虫植物の世界－虫を食べる植物たち－」	10月6日～12月27日
千葉県立現代産業科学館	「新エネルギー 風・太陽・大地－あすの地球のために－」	10月6日～11月25日
	企画展「星の降る夜」	12月21日～12月30日
国立科学博物館	「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画「ファールにまなぶ」	10月6日～12月2日
機械産業記念館(TEPIA)	「ちえものづくり展～社会を豊かにする最先端技術～」PART IV	8月6日～2月29日
葛飾区郷土と天文の博物館	葛西城発掘35周年・博物館考古学ボランティア活動15周年記念「関東戦乱 戦国を駆け抜けた葛西城」	10月21日～12月9日
地下鉄博物館	地下鉄開通80周年記念展「地下鉄の誕生と発展の足跡」	12月4日～1月27日
目黒寄生虫館	財団法人目黒寄生虫館 2007年度特別展示「それ！ほんとうに寄生虫？寄生虫！と疑われた寄生虫ではない異物」	4月29日～12月2日
多摩六都科学館	「第7回日本万華鏡大賞・多摩展」	10月13日～11月4日
馬の博物館	秋季特別展「馬のシルクロード－馬と馬文化・遙かなる道－」	10月13日～11月25日
	新収蔵資料展	12月1日～12月25日
	有馬頼寧没後50年展	12月1日～12月25日
	写真展「寒立馬」	12月1日～12月25日
横浜こども科学館	企画展「なるほど電話展」	10月6日～2月11日
黒部市吉田科学館	巡回写真展「すばらしい自然を」	10月20日～12月2日
富山市科学博物館 (旧科学文化センター)	「発明王エジソン展」	10月27日～12月2日
	「私の身近な自然展」	12月15日～1月20日
佐久市子ども未来館	企画展「まもろう地球のたからもの 世界遺産写真展」	11月10日～11月25日
ディスカバリーパーク焼津	10周年記念特別展 第3弾「木のからくりおもちゃ展」	9月15日～12月2日
豊橋市自然史博物館	第3回自然史博物館自由研究展	10月6日～11月25日
	干支展 ねずみにチューもく	12月22日～1月27日
産業技術記念館	企画展「見て 触れて 感じる ユニバーサルデザイン展～進化する使いやすさの世界へ～」	10月16日～12月2日
名古屋市科学館	企画展「名古屋城を科学する__ヒメボタルの巻」	11月3日～1月14日
あいち健康プラザ健康科学館	秋の特別展示「めざせ！炎の健康料理人」	9月15日～12月2日

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
トヨタ博物館	企画展「はたらくクルマ大集合 パート2」	7月14日～11月25日
	企画展「歌謡曲に登場したクルマたち」	9月14日～11月25日
	ギャラリー展「サタデー イブニング ポスト誌展」	～12月28日
	企画展「収蔵車両展」(仮題)	12月8日～3月23日
滋賀県立 琵琶湖博物館	企画展示「琵琶湖のコイ・フナのお話－東アジアの中の湖と人－」	7月14日～11月25日
	水族企画展示「東アジアのタナゴたち」	7月14日～11月25日
	「注文の多い湖魚の料理店」	12月11日～2月17日
大阪市立科学館	大阪市立電気科学館70年 思い出の写真展	9月7日～12月26日
きしわだ自然資料館	特別展「ミネラルワールドへようこそ2007」	10月23日～12月24日
兵庫県立人と自然の博物館	ひょうごの里山、日本の里山	10月20日～1月20日
姫路科学館	めざせ！クワガタ名人！！	7月27日～9月17日
明石市立天文科学館	「ノーベル賞を受賞した日本人の科学者展」	10月20日～12月2日
	「2008年全国カレンダー展」	12月15日～1月27日
倉敷市立自然史博物館	収蔵資料展－昆虫標本コレクション②－&むしむし探検隊報告	9月30日～12月2日
防府市青少年科学館ソラル	企画展「おもしろからくり展」	10月20日～11月25日
徳島県立博物館	新発見考古学速報展	11月13日～12月9日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	巡回展「毛利宇宙飛行士の部屋」	12月1日～1月14日
愛媛県立博物館	特別展「愛媛県児童生徒理科研究作品展」	10月27日～11月4日
	テーマ展「愛媛のきのこ」	9月29日～12月23日
北九州市立いのちのたび博物館	秋の特別展「修験の歴史と自然－西日本の山の信仰－」	～11月11日
	冬の特別展「フェアブルにまなぶ」	12月22日～2月11日
佐賀県立宇宙科学館	秋の企画展「温室効果ガス－急変する地球環境－」	10月13日～12月2日

「リニューアルオープン」

秋田県立農業科学館

(秋田県大山市)

[主な更新箇所] 第2展示室内

新設：4展示、移設8展示

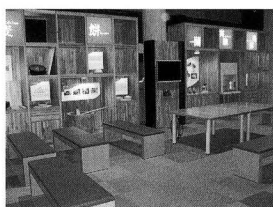
[展示面積] 472m²

[オープンの期日]

平成19年9月22日(土)

[準備期間] 平成19年7月～平成19年9月

[総工費] 10,918,425円



[準備期間] 平成19年4月～平成20年1月

[総工費] 約36,680,000円

博物館明治村 (愛知県犬山市)

[主な更新箇所] 芝川又右衛門邸

[展示面積] 266m²

[オープンの期日] 平成19年9月22日(土)

[準備期間] 平成17年1月～平成19年9月

[総工費] 約100,000,000円

埼玉県立自然の博物館

(埼玉県秩父郡)

[主な更新箇所] 2階展示ホール

[展示面積] 約150m²

[オープンの期日]

平成20年2月2日(土)



高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号

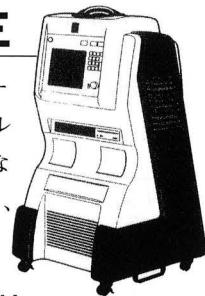
TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050

http://www.kokoro-dreams.co.jp/

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
投映を可能にした小型・高精細のデジタル
プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
さまざまなシーンで活躍します。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒173-0003 東京都板橋区加賀 1-6-1

大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インデス11階

東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町 1-8

URL: http://pla.konicaminolta.jp

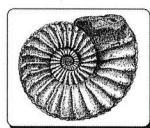
TEL (03) 5248-7051

TEL (06) 6110-0570

TEL (0533) 89-3570

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL. 03(3354)0131 (代表) ◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL 03-3350-6725 FAX 03-3350-6745

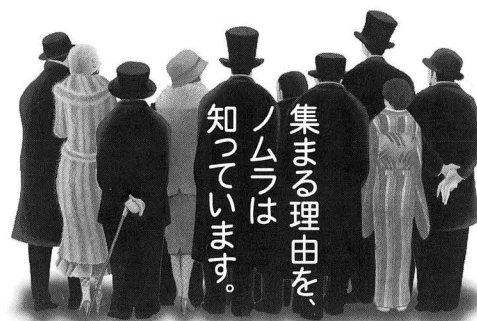
http://www.tokyo-science.co.jp

E-mail: info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

「人が集う空間」
という意味を、
ノムラは
いつもトータルで
考えています。



集客場づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、
設計、制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

B NOMURA

http://www.nomurakougei.co.jp

株式会社 乃村工芸社

本社: 東京都港区芝浦4-6-4 電話 03-3455-1171(代)



INTERIOR・EXTERIOR・DESIGN・EQUIPMENT

ONY KOBO CO., LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3 シグマ神保町4階
TEL (03) 3221-1102 (代) FAX (03) 3221-1185

動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工

より良い「社会交流空間づくり」にむけて——。

調査・企画・デザイン・設計・制作・施工・監理・
運営およびコンサルティング・プロデュース

株式会社 丹青社

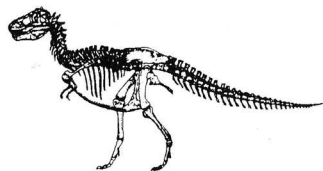
〒110-8549 東京都台東区上野5-2-2 TEL. 03-3836-7221 (代表)

札幌・仙台・名古屋・大阪・福岡・那覇

http://www.tanseisha.co.jp

*ISO14001認証取得、プライバシーマーク認定取得

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 ゼネラル サイエンス

コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802

TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

千葉県立中央博物館 教育普及課長 森田利仁

科学技術館 企画広報室次長 田代英俊

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 高橋、三浦

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成19年11月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社